

稲むらの火祭り(有田郡広川町)

絵と文・熱田親憲 題字・熱田秦華

熊野古道

ふしとくまの記

44

昨年の12月の国連総 することが決議された
会で11月5日を今年か のは記憶に新しい。背
ら「世界津波の日」と 景には1854(安政
ら(刈り取ったばかり

元)年の旧暦11月5日 の稲の束)に火をつけ
に起きた安政南海大地 て村人を高台に導いて
震の際、広村(現広川 大津波から命を救った
町)を襲った大津波に 逸話がある。

火をつけた。山寺では 式典は太鼓と笛の演
早鐘をつき出した。 奏で始まり、小学生十
「火事だ。庄屋さん 数人が「稲むらの火」
の家だ」と、若者に続 を朗読。広八幡神社宮
いて老人も、女も、子 司の佐々木公平実行委
供も山手へかけ出し 員長は「この松明行列
た。(中略)「津波だ」 で、楽しく防災意識を
と誰かが叫んだ。やが 身に付けてほしい」と
て、海水が絶壁のよう 述べた。行列の先頭に
に目の前に迫り、人々 立つヤマサ醤油十二代
は我を忘れて後ろへ飛 当主・浜口道雄さんが
びのいた。しばらくし 太鼓と巫女に囲まれ
て波にえぐり取られた て、最初の松明の火を
村を、ただあきれて見 かがり火から採り、行
下ろしていた。我に返 列の先頭に立った。 認し合った。厳肅なひ

1937(昭和12) 年文部省発行の小学校
国語読本巻十に「稲む
らの火」として掲載さ
れた。その抜粋を紹介
しよう。

「これはただ事では ない」とつぶやきなが
ら五兵衛は家から出て きた。長くゆったりと

「これはただ事では ない」とつぶやきなが
ら五兵衛は家から出て きた。長くゆったりと

梧陵の防災意識受け継がれ

したゆれ方と、うなる ような地鳴りは、古い
た五兵衛には不気味な ものだった。目を村か
ら海に移すと、(中略)

生命を見守るような とときだった。松明は
優しい穏やかな炎を掲 神社に上り、奉納され
た。

波が沖へ沖へと動いて 海岸は広い砂原や黒い
岩底が現れた。「大麥 津波がやって来る

この火祭りは広川町 で防災体験イベントと
して、11月5日の津浪 祭と併せて行われる。
広川町が津波防災教育 の基地として日本全国
に、そして世界に向け て情報発信を続けてほ
しいものである。

だ。津波がやって来る の後、梧陵の人命尊重
の精神と防災意識は 高台にある広八幡神
社。辺りはとっぷりと

目的は約2ヶ先の 田んぼに火祭り用の稲
むらが三つ用意されて

に違いない」と、(中 略)五兵衛は大きな松
明を持って飛び出し、

防炎の火柱燃ゆる刈

(左上から左回りに) 燃える稲むら、朗読する小学生、浜口梧陵翁銅像、広八幡神社



田のすべての稲むらに 行われた。

防炎の火柱燃ゆる刈

田原 秦華